

## ■ 授業者より

### 1 研究について

- ・表現と鑑賞を往還する題材構成や対話（児童同士、教師、自分自身）により、自分の表したいことを追求することにつながることを考えた。
- ・つくりつつある表現や作品を写真や動画などに記録することで、表現や変化を視覚的に捉えたりよいと思ったことを自覚したりすることが創り出す喜びの実感につながることを考えた。
- ・児童の学びを捉えることで、対話を促し、指導につながり個別の指導に生かしたりすることができることを考えた。

### 2 単元について

- ・第1時は水で濡らした布を使ってどのような形がつかれそうかを試した。
- ・第2時は液体粘土を布に染み込ませて形作った。
- ・第3時（公開）は、固まった形をいろいろな方向から見てイメージに合う色を付けたり固定方法を工夫したりして作った。
- ・第4時は、自分のイメージが伝わる場所や置き方を工夫して展示した。

### 3 成果

- ・友人や自分と対話する時間をつくることで、自分の表したいことや表し方に対する考えを追求できた。
- ・自分の表現を記録に残すことで、変化などを捉えやすくなった。

### 4 課題

- ・実際に実物を見たり触ったりしながら鑑賞することも図工では大切であることから、ICT機器を使うタイミングについては更なる吟味が必要。

## ■ 研究協議（主なものを抜粋）

- ・児童は「ベストショットを撮る」ことを初めから分かっていたのか。そうであれば、自分が主張したいことを表す作品を作ったのでは。  
→第3時に伝えた。第2時では具体的な何かをつくることにはしていなかった。造形遊びのように、液体粘土を染み込ませた布で、自分がよいと思う形を追求した。それが固まったときに何に見えてくるかを探る活動としていた。
- ・具体的なものと抽象的なもの、最終的にどちらが多い傾向だったか。  
→「怒り」などの抽象的なものもよしとしていたが、児童同士の「〇〇に見えてきた」という対話が影響したのか、**具体物が多かった。**
- ・固まった液体粘土の表面（でこぼこ、つるつる）に差はあったのか。また、それにより見立てを変えるものなのか。  
→中に物を入れて固めた場合は、**内側がつるつるした状態**となる。少数だが、その部分を触って確かめた結果、**ひっくり返して内側を表に出して使おう**としていた児童もいた。
- ・表現と鑑賞の往還をうまく授業中に折り込んでいて効果的だった。
- ・指導案にある「動きとバランス」についてどのように指導していたのか。  
→作品を見たときに、**感覚的にどのように感じるのか**を話すことを大切にしました。また、飾るときに**どの向きから見せたいのか**ということも大事にした。

## ■ 指導助言

上川教育局義務教育指導班 主任指導主事  
高橋 哲雄 様

### 1 教師と児童の関わりから

- ・学習指導要領の文言より、図画工作科は「自分」を非常に大事にしている教科であることが分かる。だから、自分で決めるという学習過程が大切になってくる。
- ・前時までには試しの活動を十分に行っていた。また、本時にはベストショットを撮る活動を設定し、子供たちは様々な角度からタブレットを用いて写真を撮り、自分のイメージを膨らませていた姿が見られた。
- ・本時の指導のポイントを「対話」としていたが、**共通事項に示されていることを視点としながら、言語活動が盛んに行われていた**（感じたことや思ったことを話す、聞く、話し合う）。また、**表現の過程を撮影した写真と言葉で整理しながら、その変化を見ていた。**
- ・本時のように、**友達の作品や活動に目が向くように交流する場面を適宜位置付けたり、互いのよさに気付いたりする活動は非常に大切であり、図工が得意な児童も苦手な児童も自分が主役だという授業づくりを目指していたことが分かった。**

### 2 授業改善の視点

- ・交流する目的は何かを明確にし、児童と共有すること。本時では、よいところを伝えることが目的化してしまっている姿もみられた。例えば、**自分の作品のイメージを伝え、よさを互いに話し合いながら自分のイメージを明確にしよう**といった投げ掛ける。すると、児童は自分の作品のイメージを伝え、そのイメージについて相手がどう思っているかを交流し、**互いに自分のイメージをより明確にもつという交流の目的を明確にできる**のではないかと。

## ■ 指導助言

北海道教育大学旭川校 准教授

岩永 啓司 様

### ・「探求」について

今回の題材のように初めて触れる素材との対話を通して動機が形成されていくような活動は、**漠然とした状態からあるものを探し求めていくイメージが近い。**

### ・「造形的な見方・考え方」について

生活や生涯にわたる**自己表現や自己探求に活用されて初めて意味をなす**ものである。

### ・「動き／動勢」について

木を例にすると、木の幹の部分が、「動き」にあたる部分。我々は色を先に認識する傾向にあるが、基本的造形要素で示されているのは「形と色」の順。形を捉えるために、モノクロの写真で見るという方法が考えられる。今回の授業では、**着色する前の形から動きをイメージしていたところに工夫があった。**

### ・「バランス／釣合」について

木を例にすると、傾いた幹の部分のみに着目すると、倒れそうだと感じる。しかし、枝の出し方まで見ると、その方向によって安定したように見ることがもできる。見えない部分では、根を張っている部分で安定しているとも捉えられる。つまり、**我々が認識していない部分にもバランスをとっている要素がある。**

### ・「表現と鑑賞の往還」について

「表現の幅を広げる時間」と「表し方や展示のイメージを意識付ける時間」の2つの意味があった。**共通点は、見る側が意味をつくっている時間**であること。

### ・「対話による表現の追求」について

教師と児童との対話がポイントだった。授業者が描く学習デザインによって、児童への関わり方や動き掛け方は変わる。**教師自身が「見方・考え方」をどのように捉えているか**という点については、**図画工作科の核の形成に大きな影響を与える**ものである。